

子育て・教育をみんなの 手で

馬島直樹（長野県子どもを守る会）



【はじめに】

1. コーディネーター

馬島直樹（長野県子どもを守る会）

子育て・教育における「協同」をテーマに、「子ども期の創造」を目指して、多様な取り組みの交流をすすめたいと課題を提起した。

2. コメンテーター

池本美香（株式会社日本総合研究所）

次の事項について解説し、課題提起をした。

子育て・教育の現状

子ども…児童虐待、不登校、ひきこもり、犯罪親…未婚率上昇、離婚増加、失業率上昇、自殺増加、少子化

いまどきの親の特徴

受験戦争・偏差値教育で育った親

…<協力>より<競争>の体験を多く持つ世代

都市化する社会に育った親

…効率性、予測可能性、計算可能性を重視する世代

「選択の自由」のある親

…選択肢にないものを創る自由を忘れた世代

おまかせ保育、専門化主義、お金で解決、ドライな人間関係、失われる子育ての時間

そのことによる閉塞感、孤独、不安、ストレス

大人にとって子育て・教育への参画、協同が必要ではないか。

【報告】

1. 今、学校に求められている心の通い合う教職員集団

原山 晃（県教組子どもと親の教育相談室）

ここ2～3年の相談の特徴として、小・中・高の学齢期を過ぎた青年の相談が増えている。相談内容は、引きこもり・非行・乱れた生活・性的問題等があるが、「就職できない」「職がない」「リストラにあった」などが多く、児童・生徒の頃のいじめや学校の対応で傷つき、その傷がいつまでも残っている例が多い。

長野県では田中知事のもとで、不登校・引きこもりの子ども・青年への対応として、「子どもサポートプラン」の予算化がなされたり、多

- コーディネーター 馬島直樹（長野県子どもを守る会）
- 報告者 原山 晃（子どもと親の教育相談室）
依田知恵（あゆみの会）
内田幸一（NPO法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト）
設楽明彦（労協センター事業団東京事業本部）
若林昌昭（生活協同組合コープながの政策推進室）
宮下与兵衛（長野県辰野高等学校）
- コメントーター 池本美香（株式会社日本総合研究所）

動性の子どもの指導で苦慮しているという学校へ、瀬良県教育長が一週間ぐらい毎日通って実態を把握し、職員を加配するなどという施策を実行してきた。しかし、教育現場は管理統制でがんじがらめで、田中県政のめざす中味が現場に根をはれない状況である。

教職員の悩み・苦しみによるせっぱつまった相談事例も増えている。このごろは自分の子の不登校・いじめ、過労、職場に話し相手がいないことなどによる悩み、苦しみの相談が増えている。

学校現場では、いじめや問題行動が発生すると担任や担当職員の「指導力」が問い質され、他の教職員は「うちのクラスでなくてよかった」と本当に思う。こうした中で次のような事例があった。

Aさんは子どもと正面から向き合い、子どもの心を受けとめようと、一人で必死の取り組みをしたが、ほとんど失敗し、悩み、焦り、苦しんで医療機関に通うようになったが、そういうAさんに集まる視線は素っ気なく、冷たかった。学校では研究や実践の発表はよくあるが、本音での話し合いが不足している。Aさんの様子に気がかりだったBさんが社会見学の下車で車に同乗し、「子どもとうまくいかなくてねえ」と話しかけたところ、Aさんが「堰が切れたように」いろいろ話し出した。それを機にBさん

は1人2人とまわりへ呼びかけ、「本音」の話し合いをし、管理職も次第に変化するようになった。

いろいろなところで、正面から受けとめてもらえず、ワラにもすがる思いの相談者が多い中で、指示、批判は厳禁。ともかく共感するところから相談することを基本的態度にしている。

2. 子どもサポートプラン・上田地区の取り組み

依田知恵（あゆみの会）

(1) 長野県独自の不登校対策事業「子どもサポートプラン」

2001年に不登校の子どもの親たちが県知事室を訪れ、田中知事と親しく面談したことから県教育委員会と不登校関係の民間団体との連携が始まった。県下の不登校の子どもたちへの支援活動のネットワーク化をはかる「不登校情報ネットながの」の設立総会に知事がシンポジストとして参加し、2002年には瀬良教育長のもとで6回の懇談会が持たれた。そこで、不登校のとらえ方について意見交換がなされ、民間主導の「子どもサポートプラン」策定がなされ、2003年には県下7地域でフォーラムが実施された。

文部科学省による不登校の対応は、早期発見、早期対応で学校復帰をさせようとするが、

学校が本人にとって居づらい状況にある中で子どもが追いつめられている。子どもサポートプランの主旨は、子どもの「最善の利益」を考慮し、多様な支援をすることで、学校復帰は選択肢の一つ。不登校をその子にとって必要なこと、生き方として肯定的にとらえている。

(2) 上田地域の取り組み

< 2003 年度 >

民間と行政で地域推進会議発足
広報活動 フォーラム開催
相談活動 コーディネーターが面談し、支援を手配
ハートフレンド活動

< 2004 年度 >

7市町村の教育委員会回り実施
「不登校を語る会」を教育事務所と共催、学習会開催
お出かけ懇談会
親たちの会を月2回開催（昼と夜）
親が変われば子どもも変わる。
サポートセンターの充実・・・常駐スタッフの配置、広報誌リーフレット作成
民間推進チーム中心に地域プラン立案

(3) 一年半の取り組みから感じていること

- ・民間と行政が同じテーブルに着くという画期的な取り組み
- ・不登校のとらえ方について、県教委とはある程度歩み寄りがあるが、市町村教委とは温度差がある
- ・学校は学校復帰先行の対応なので、サポートプランに拒否的な教師が多い
- ・不登校は学校のあり方の問題提起と価値観の見直しを迫っている。
- ・不登校支援のポイントは、自己肯定感を持たせること（子育ての基本）
- ・経験者は色々な体験を持っているので、経験者に学んでほしい。

3. 子どもの森幼稚園、グリーンヒルズ小学校

内田幸一（NPO法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト）

幼小一貫の体験重視の学校づくり

1983年以来、長野県の高度1,000mの飯綱高原で、私設の「子どもの森幼児教室」の活動を続けてきた。自然体験を筆頭に体験を通して学ぶことに重点を置いてきた。卒業した子ども達は300名になり、立派な青年の姿で訪ねてくれたり、便りを届けてくれる。

1996年以来、長野市からの業務委託でNPO法人「子どもの城いきいきプロジェクト」として旧ダイエービルの2階で、大型子育て支援センターづくりをすすめてきた。80組の登録があり、子育てサロン、遊び教室等を開いている。

この度、「子どもの森教室」はNPO法人に引き継ぎ、「子どもの森幼稚園」になり、更に同一の学校法人で幼小一貫による体験活動を基本とした教育の場をみざすことになった。

いいづな学園「グリーン・ヒルズ小学校」

「グリーン・ヒルズ小学校」は小さな学校であるが、その理念は次の6つである。

子どもが学習の主人公。 自尊感情、自己肯定感がつぶされない。 自発性中心、よけいな制限がなく、選択ができる。 幅広い授業形態、多様なスタイル。 子どもとの協議で決める。大人と子どもの民主的な関係。 地域との連携。

先生（先生とは呼ばないが）は、その子に合った教材や課題を作成し、基礎学習や個別指導で、子どもはコンプレックスを持たず、自分のペースで確実に学力を身につけていく。様々な専門家のボランティアで、いろいろなアイデアを出し合ってつくり上げていく学校にしたい。

小さな学校からの教育改革

今の公立学校はこれでいいのか。先生たちは努力を怠っているわけではないが、制度的に無理があり、子どもの期待感にこたえきれていない。国の行政改革特区の制度で膨大な資金を必要とせず、校地・校舎の借り上げでも学校が設立できるようになったので、これを機に市民が担い手となって、自ら求める教育のあり方、場を作っていきたい。これまでのツケがあり、容易ではないが、多様な学校がいくつも誕生し、学びたいものを学びたいスタイルで学べる、そんな時代が近い将来やってくると考えている。

4. 学童保育での子育て

設楽明彦（労協センター事業団 東京）

東京事業本部では、学童保育（公設民営）の受託がすすみ、2年前には1ヶ所だった学童も今は7ヶ所になった。20年の子育て事業の積み重ねの上に成立したもので、根本に「協同労働の協同組合」だったからできたという自負がある。学童保育の現場に身をおき、日々子どもとある時は笑い、おこり、ほめるというすばらしい生活をしている。

(1) 今の子どもの現状

ファミコンゲーム大流行 「ゲーム脳の恐怖」 キレやすい 生活のリズム、身体の状態 文部科学省調査 外遊び・集団遊びの減少 学級崩壊・小一プロブレム
12歳以下の不幸な事件

(2) 現場から見た状況

以下のあたっているところ

- ・ファミコン好き
- ・就寝の遅さ
- ・ほっといても遊ばない

(3) 評論家ではない私たちのしている事

現状を認識しつつも、意識した取り組み
・学童の中だからこそ当たり前のことを当

り前にする。

- ・きちんと子どもを受けとめる こちらが望むことはきちんと子どもに要求する。共に考える。できたこと・発見を共有する。ほめる時はほめる。
- ・メリハリのある生活づくりをする。遊び・はじめの会・帰りの会・おやつ・宿題をテンポよく構成する。
- ・集団の中だからこそ見える一人ひとりの輝き。
- ・幼児期をしっかりふみしめ、少年期・少女期へ。

事例1 . ワーカーズコープの学童クラブでの「はじめの会」の様子。学校であったこと、嬉しかったこと、嫌だったことなどを自由に率直に出し合う。なぜか、どうしてかを問い返し、話し合い、みんなで合意化、ルール化し、嫌なことは次の日に持ち越さないことをモットーにしている。

事例2 . 「わくわくクラブ」では「らっしゃーい」と商い塾を楽しみ、商店街の人とも交流し、すごい興味、すごい興奮で、「つかれて、つかれて…つかれませんでした」と何か希望が生まれてくる体験をした。

事例3 . 「ワーカーズコープ」の学童クラブでは、指導員たちが、具体的な事例をあげて問いあい、励ましあって成長しながら実践を積み重ねている。

5. コープながの子育て支援活動たんぼひろば

若林昌昭（生活協同組合コープながの政策推進室）

子どもたちが目を輝かせて生きられるような家庭、学校、社会環境を取り戻すことに努力す

る必要があると考え、98年度に理事会のもとに「子育て・教育問題検討委員会」を設置し、99年1月に「コープながの子育て教育問題に関する答申」をとりまとめた。子の答申を受けて、就園前の乳幼児を抱えた母親や、育児を任された祖父母の子育て支援として、2001年6月よりコープ稲里店の組合員ルームを開放して「たんぼひろば」を開催するようになった。2002年4月からは、コープ若槻店の組合員ルームでも開催している。

1. たんぼひろばの子育て支援とは

安心して子ども連れで過ごせる場の提供
親同士、子ども同士の出会いの場の提供
情報交換ができる場の提供

2. 支援によって目指すものは

家にももりがちの乳幼児を抱えた親のストレス解消
親と子が他者とふれあうことで育ちあうこと
自ら情報を得て行動できるような感覚の芽生え。

3. たんぼひろばの概要

開催時間：月3回、10時～15時
参加費：親子一組につき100円
当日運営：保育士の資格をもつ組合員スタッフが2名ずつ担当（スタッフ5名）
子どもたちの要望によって、紙芝居や手遊び等を行う。大きなすべり台と絵本や木や布のおもちゃを用意している。
事前の申し込みの必要はなく、時間内であればいつ来てもいつ帰っても自由。昼食やおやつなどの飲食も自由。

4. 今後の課題

開催場所、駐車場、スタッフの確保、備品代、スタッフにかかる費用等。

<参加者の感想>

- ・アットホームな感じでいい。
- ・同じ年頃の子どもと遊べて嬉しい。

・自分の都合のいい時間に来られ、いつもあたたかく迎えられて嬉しい。親同士も様々な話ができるので嬉しい。

・買い物もすぐできて便利。

6. 辰野高校の「三者協議会」と「フォーラム」の取り組み

宮下与兵衛（長野県辰野高等学校）

長野県辰野高校では、1994年から地域住民と辰野高校の教育について語る会（97年からフォーラム）を開催してきた。97年には生徒・父母・教職員による三者協議会を足踏させ、三者の共同による学校づくりをすすめてきている。地域に学校を開き、生徒・父母の学校運営への参加を保障するという両輪で「開かれた学校づくり」の取り組みにより、とりわけ生徒会の活動が活性化している。

「辰高フォーラム」と生徒会のゴミ回収

辰高フォーラムでは「辰野高校の教育」という1年間の教育実践の冊子を使って話し合いを行う。地区会長さんから「コンビニで食べ物を買って、道路にゴミを捨てて困る」という発言があり、三者協議会で意見が出され、生徒会によるゴミ回収の取り組みが始まり、田中知事からも表彰された。

生徒会が「地域との連携」を掲げて活動

2001年のフォーラムから分科会形式を取り入れ、学校と地域がどう協力・連携できるかを地域の人々と生徒・父母・教職員で話し合ってきた。「地域」の授業（総合学習）で、町の担当者から福祉・保育・ゴミ処理・ボランティアなどについて講義してもらい、現場を見学し、町づくりプランをつくって町役場に提出したことが評価された。地域の産業振興と高校生の就職保障が一体のものとなる取り組みである。

翌年のフォーラムのテーマは「地域と学校の活性化をめざして～地域に根ざした教育の展開

～」とした。このフォーラムで、「町に生徒の作品を展示してほしい」「町の行事に生徒会が企画段階から参加してほしい」等の要望が出され、生徒会がこの要望を受けとめて活動を始めた。「辰高創立90周年記念企画」では町民から町の太鼓の指導を受け、生徒・父母・教員の有志が町民とともに演奏した。又、「魅力ある町づくりと合併問題」をテーマにシンポジウムを開催した。事前に全校生徒がとったアンケートでは「合併反対」が82%になり、その理由の一番は「今の町や村が好きだから」であった。この取り組みは、マスコミに大きく取り上げられ、地域住民からも評価された。町議会が開催した「合併問題についての公聴会」でも生徒代表が意見発表をし、地元新聞に報道された。また商工会と協議を重ね、商店街の駐車場でフリーマーケットを定期的で開催して商店街に若者呼び寄せることにした。

三者協議の発足

97年、全生徒・全父母・全教職員の三者に学校目標についてのアンケートをとり、三者の代表で議論を重ね、「わたしたちの学校づくり宣言」を作り上げ発表した。この学校目標を実現していくシステムとして「三者協議会」を設置した。この三者には生徒会役員9人、PTA役員5人、教頭・教務主任・生活指導主任をあてた。協議会に提案するには、生徒会、PTA、職員会とも全構成員の決議を必要とする。協議会は学期に1回だが、要請があればいつでも開催する。公開制で、誰でもオブザーバー参加で意見を出せる。協議内容は全員に報告される。

三者協議会で改善してきたこと

三者協議会を設置してから6年間に「上履きの改善」「アルバイトの規定の改正」「標準服の導入」などについて協議し、三者で新しい校則を決めて、生徒会は「自分たちで決めた規則を守ろう」と取り組んでいる。

授業改善について

生徒会は全校生徒から授業アンケートを回収し、「授業改善要望」をまとめて三者協議会に提出した。これを受けて教職員は教科会を持ち、誠実に回答した。職員会からは生徒の授業態度や家庭学習に対する「改善要望」を提出した。これを受けて生徒会は各クラスの授業目標をまとめて協議会で回答した。家庭学習時間ゼロの生徒が65%という結果が問題になった際、生徒会は「宿題を出してほしい」と要望し、それが実現して、翌年は35%になったりした。

辰野高校では「開かれた学校づくり」により、更なる学校の活性化をめざしている。
(宮下与兵衛著『学校を変える生徒たち』かもがわ出版 参照)

[まとめ]

参加者は51名、午前も午後も満席であった。紙数がなくなり、「質疑・討議」の様子を載せられないことをお詫びします。

コーディネーターの私は、分科会の初めに「競争原理」ではなく「子育て・教育における『協同』を」と、そのために、子ども同士、子どもとおとな、おとな同士(同世代・異世代、親・先生・住民)の人間関係を豊かに、そして「子ども期の創造」と述べた。6本のレポートから学ぶべきことが多いとともに、これを家庭・園・学校・地域で大きなうねりにしていくのは容易でないことを実感した。

コメンテーターの池本氏からも、「協同・参画」の重要性は認識されてはいたが、「子育て・教育における協同」というテーマへの取り組みは、まだ本格的なものになっていないという意味の発言があった。